二方向の敬語 確認テスト（謙譲＋尊敬） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 中納言が、帝にお手紙を申し上げなさる。（「聞こえ」＝申し上げる、「給ふ」＝〜なさる）

問2 「聞こえ」＝謙譲語（「言ふ」の謙譲、申し上げる）／「給ふ」＝尊敬語。「聞こえ」で動作の受け手（帝）へ、「給ふ」で動作主（中納言）へ敬意を表す二方向の敬語。

問3 謙譲語「聞こえ」は、動作主である中納言から、動作の受け手である帝への敬意を表す。

問4 尊敬語「給ふ」は、動作主である中納言への敬意を表す。

問5 謙譲語＝「聞こえ」／尊敬語＝「給ふ」。「教へ」という動詞の本体に、謙譲の補助動詞「聞こえ」と尊敬の補助動詞「給ふ」が重なった形。

問6 謙譲語＝「申し」（「言ふ」の謙譲、申し上げる）／尊敬語＝「給ふ」。「申し」で受け手（帝）へ、「給ふ」で動作主（女御）へ敬意を表す。

問7 動作の受け手である帝への敬意。（「申し上げる」相手＝帝）

問8 尊敬語「給ふ」は、動作主である女御への敬意を表す。

問9 翁が、宮に珍しい玉を差し上げなさる。（「奉り」＝差し上げる、「給ふ」＝〜なさる）

問10 謙譲語＝「奉り」（「与ふ・参らす」の意の謙譲、差し上げる）／尊敬語＝「給ふ」。「奉り」で受け手（宮）へ、「給ふ」で動作主（翁）へ敬意を表す。

問11 動作の受け手である宮への敬意。（「差し上げる」相手＝宮）

問12 謙譲語「奉り」は受け手である東宮への敬意、尊敬語「給ふ」は動作主である右大臣への敬意を表す。

問13 上達部が、院にお手紙（ご連絡）を申し上げなさる。（「聞こえ」＝申し上げる、「させ給ふ」＝〜なさる）

問14 謙譲語＝「聞こえ」（申し上げる）／尊敬語＝「させ給ふ」。「させ給ふ」全体で一つの尊敬の補助動詞（最高敬語相当）として動作主に敬意を表し、謙譲語「聞こえ」と合わせて二方向の敬語となる。

問15 動作の受け手である院への敬意。（「申し上げる」相手＝院）

問16 尊敬語「させ給ふ」は、動作主である上達部への敬意を表す。

問17 「参らせ」＝謙譲語（差し上げる・〜し申し上げる）／「給ふ」＝尊敬語。「参らせ」で受け手（若君）へ、「給ふ」で動作主（母君）へ敬意を表す。

問18 大納言が、帝にこの事情を奏上なさる（申し上げなさる）。「奏す」は天皇・上皇に「申し上げる」意の絶対敬語（謙譲）で、ここに尊敬語「給ふ」が付き、受け手（帝）と動作主（大納言）の双方に敬意を表す二方向の敬語となっている。

問19 ⑤「聞こえさせ給ふ」は、謙譲語「聞こえ」＋尊敬語「させ給ふ」で、受け手と動作主の二方向に敬意を向ける二方向の敬語。これに対し⑨「物せさせ給ふ」は「物す」＋尊敬の助動詞「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」で、尊敬語が二つ重なっただけの最高敬語（二重尊敬）であり、敬意は動作主（帝）一方向にしか向かない。謙譲語を含むか否かが決定的な違いである。

問20 最高敬語（二重尊敬）。「失せ」（「死ぬ」の婉曲）＋尊敬の助動詞「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」で、謙譲語を含まず尊敬語が二つ重なった形だから。敬意は動作主である院一方向のみで、受け手への敬意はない。

問21 「参り給ひて」の「参り」は、参上する先である内裏（＝帝のおはす所）への敬意で、受け手（帝）への敬意。「候ひ給ふ」の「候ひ」は、お仕えする相手である帝への敬意。いずれも謙譲語で受け手＝帝に敬意を向ける。

問22 謙譲語＝「聞かせ奉り」のうち「奉り」／尊敬語＝「給ふ」。「弾き聞かせ」は「弾いてお聞かせする」の意で、謙譲の補助動詞「奉り」が受け手への敬意を担い、「給ふ」が動作主（后）への敬意を担う。謙譲語「奉り」は、演奏を聞く受け手である帝（上）への敬意を表す。

問23 謙譲語「聞こえ」は、法を説き申し上げる相手＝受け手である帝への敬意。尊敬語「給ふ」は、動作主である僧都への敬意。

問24 正しいのは「謙譲語＋尊敬語」。謙譲語はまず動作そのものに密着して受け手への敬意を添え、尊敬語はその動作全体を高めて動作主へ敬意を向けるため、内側に謙譲語、外側に尊敬語が立つ順序になる。

問25 （例）二方向の敬語は受け手と動作主の二者に敬意を向けるが、最高敬語は動作主一者だけに敬意を向ける点で異なる。（五十字程度）